

# テレビ・ニュースのリード文における 有題文・無題文の選択

Andreea SION

キーワード：主格名詞句、指示対象の同定可能性、述語の意志性、情報の導入

## 1. はじめに

テレビ・ニュースの談話は、ひとつの大きい談話主題（広い意味では、「最近起きた、ある出来事」）について述べる談話である。情報の伝達がテレビの画面を通して行われており、伝達に積極的に参加していない受け取り手に向かうため、一方的なものであるといえる。

テレビ・ニュースは時間的・量的に限られた、線状的なものであるため、高い簡潔性が必要であるが、同時に受け取り手の（想定される）背景的知識と期待に合わせた高い情報性が目指されている。このため、伝達に積極的に参加できない受け取り手が、伝えられた内容を容易に（すなわち、低い認知的コストで）理解・処理できるように、談話で次々に導入される新しい情報は明確に文脈化され、受け取り手の背景的知識などに連結される。特に各ニュースの最初の発話（以下では「リード文」と呼ぶことにする）では、受け取り手が次に伝えられる内容について何らかの文脈を全く持たないため、その内容を受け取り手が既に持っている知識と連結させるように、様々な言語手段が用いられる。

本稿ではテレビ・ニュースのリード文を対象とし、有題文と無題文の選択がどんな要因に関わっているのかを明らかにすることを目的とする。

本稿で「有題文」とするのは、「主格名詞句+は」のように、主節の主格名詞句が「は」でマークされる文、「無題文」とするのは、主節の主格名詞句が「が」でマークされる文である。

リード文では受け取り手にとって未知である出来事、すなわちどんな状況で、どんなことが起きたのか、またはどんな主体が何をしたのかについての主な情報が導入されると考えられる。本稿では、上記で述べた三つの点とのかかわりで、有題文と無題文の選択に影響を与えると考えられる、次の三つの要因に注目し、分析を行う。まず、リード文では「どんな主体」について述べられているかを明らかにするために、①主格名詞句の指示対象の特徴を探る。次に、リードではどのような出来事が伝えられているのか（すなわち、「どんなことが起きたのか」あるいは「主体が何をしたか」）を明らかにするために、②リード文で用いられる出来事のタイプを分析する。最後に、リード文で伝えられる出来事の起

きた「状況」とのかかわりで、③新しい情報の文脈化・連結のしかたについて考察する。

本研究の資料となるものは、NHK が通常のニュース番組で放送した、様々な話題について伝えている 100 件のニュースのリード文である。ただし、リード文にはしばしば、以下の例 (1) のように、文末に現れる主節の主格名詞句以外の主格名詞句が含まれる場合がある。これは、リード文が複数の節によって構成され、これらの節の意味内容の独立性が高いと考えられる場合である。本稿では、このような節における主格名詞句も考察対象とする。したがって、研究の対象となる主格名詞句の合計は 110 件である。そのうち、有題文は 45 件であり、無題文は 65 件を占める。

(1) a. 今日午後、横浜市の金沢区で、下校途中の小学生の列に乗用車が<sup>主格名詞句 1</sup> 突っ込み、／[節 1]

b. 1人が<sup>主格名詞句 2</sup> 死亡、／[節 2]

c. 4人が<sup>主格名詞句 3</sup> 重軽傷をおいました。[節 3-主節]

[NHK 首都圏ニュース 20:45 / 13.09.02]

## 2. 先行研究

本節では、ニュースの談話に似た談話のタイプである新聞記事の冒頭文における有題文・無題文の選択に関与する要因を扱った先行研究を取り上げる。

野田 (1984) では、新聞記事の冒頭文において、「NP は」・「NP が」の選択に関わる条件として、以下のものが挙げられている。

### ①述語の性質に関する条件

● 恒常的な状態などを表す述語の場合：

[条件 1]：述語が(a) [名詞+「だ」(名詞述語)]、または(b) [恒常的な状態、感情・感覚を表す形容(動)詞述語]、または(c) [習慣的な動作、真理、所有、精神活動、意志、可能、義務などを表す動詞述語] である場合、文は普通有題文である。(野田 (1984) : pp. 66-67)

● 意志的な動作または非意志的な動作の場合：

[条件 2]：文の述語が意志的な動作を表す動詞であれば、その文は有題文になりやすい。一方、非意志的な動作を表す動詞であれば、無題文になりやすい。(p. 67)

### ②主格名詞句の性質に関する条件

● 主格名詞句が意志的な動作の動作主である場合<sup>1</sup>：

[条件 3]：文の述語が表す動作が予想しやすく、または動作主がその動作をすることに意外性が少なければ、文は有題文になる。一方、動作が予想しにくく、動作主がその動作をす

<sup>1</sup> 例えば、動作主が人物、団体、機関などの場合。

ることに意外性があれば、文は無題文になる。(p. 68)

● 主格名詞句が意志的な動作の動作主でない場合<sup>2</sup>：

[条件 4]：主格名詞句の指示対象が読み手の関心を集めていない、または予想しにくい場合、その文は無題文になる。一方、主格名詞句の指示対象が読み手の関心を集めており、予想しやすい場合、文は有題文になる。(p. 70)

### ③語順に関する条件

[条件 5]：主格名詞句が主題になる資格をもっている、語順が[対格—主格—動詞]であれば、その文は普通無題文になる。(p. 71)

### ④文章全体の中での冒頭文の機能

[条件 6]：場面設定あるいは話題導入の機能のみを持っている文は無題文になる。(p. 72)

野田(1984)で述べられた、上記の ①述語の性質に関する条件と②主格名詞句の性質に関する条件(すなわち、条件 1～4)が、本研究で分析する[出来事のタイプ]と[主格名詞句の指示対象の特徴]という、2つの要因に大きく関わっていると考えられる。したがって、本稿では、野田(1984)の条件 1～4 のみに注目し、テレビ・ニュースのリード文で見られる現象にも適用されるか否かを分析していきたい。

## 3. 有題文・無題文の選択に関わる要因

本節では、ニュースのリード文において、「NP は」または「NP が」の出現との関わりで、以下の三つの要因に注目する。

- ① 「は」・「が」の選択にその名詞句が持っている指示対象のステータス(すなわち、受け取り手にとって新情報かあるいは旧情報かであること)が関与すると考えられるため、代表的な先行研究に基づき、「NP は」・「NP が」それぞれの指示対象のタイプを考察する。
- ② リード文で伝えられる出来事のタイプも「NP は」・「NP が」の選択に影響を与えると考えられるため、出来事のタイプを反映する、文の述語の種類を考察する。
- ③ 最後に、「NP は」・「NP が」が受け取り手の背景的知識にどのように連結されるかを明らかにするために、リード文の文頭で提供される情報を考察する。

### 3.1 主格名詞句の指示対象のタイプ

ここでは、主格名詞句に注目し、それぞれの指示対象が持っている性質を考察したい。分析の理論的枠組みとなるものは、Chafe (1976, 1987), Prince (1981), Givón (1988), Lambrecht (1994) などのような、コミュニケーションの際に伝達される情報を認知的な

<sup>2</sup> 例えば、動作主が物、事柄、非意志的な動作を行う人物などの場合。

観点から扱う先行研究である。

代表的な研究である Lambrecht (1994) では、指示対象の *identifiability* (受け取り手にとっての同定可能性) という概念に基づいて、談話の中で現れる様々な指示対象の (受け取り手にとっての) 認知的ステータスが以下のように分類される。

A. 同定可能な指示対象 (*identifiable*)<sup>3</sup>

1. 活性的な指示対象(*active*): 発話時に聞き手の意識の焦点にあるもの
2. アクセス可能な指示対象(*accessible*): 発話時に聞き手の意識の焦点にはないが、談話の先行文脈あるいは場面から、あるいは推論的に同定できるもの
3. 不活性的な指示対象(*inactive*): 聞き手の長期記憶に保存されているが、活性化していないもの

B. 同定不可能な指示対象 (*unidentifiable*)

4. 先行文脈に何らかのかたちで連結された、新しい情報 (*anchored*)
5. 先行文脈にまったく連結されていない新しい情報 (*unanchored*)

(Lambrecht (1994):109)

また、Lambrecht (1994) では、指示対象の同定可能性の程度によって、主題になりやすいものとなりにくいもののスケールが立てられている。Lambrecht によると、一番主題になりやすいものは同定可能な指示対象の [活性的な指示対象] であり、次に [アクセス可能] > [不活性的] > [新、+連結] > [新、-連結] の順序で、指示対象は主題になりにくくなる。

次に、受け取り手にとっての同定可能性と主題のなりやすさの観点から、テレビ・ニュースのリード文で導入される主格名詞句の指示対象の性質 (すなわち、活性の状態) とその具体的な現れ方との関係を分析したい。

考察したニュースのリード文では、主格名詞句の指示対象は大きく、以下のような2つのグループに分けられると考えられる。

- (a) 日本の皇族、他国の大統領、日本・他国の政府機関、様々な組織またはその代表者 (委員会など)、経済機関などのような指示対象
- (b) 個人 (例えば、「～容疑者、おとこ、子供達」)、事物 (例えば、「新築マンション」)、またはイベント (例えば「展示、音楽祭」) などのような指示対象

<sup>3</sup> Lambrecht (1994)によると、「同定可能」のクラスは以下のようなものを含んでいる。(a) "mother", "the sun", "the President of the United States"のような、聞き手のディスコースモデルに唯一の指示対象を持っている名詞句、または「クラス」を意味する総称名詞句;(b) ディスコース内・外的な世界において、顕著な指示対象を持っている名詞句;(c) 様々な認知的フレームに属する指示対象。

上記の(a)グループに属するものは、一般的に受け取り手の関心を集めている指示対象であり、Lambrecht (1994) の分類では【同定可能】(すなわち、【活性的】あるいは【アクセス可能】) のクラスに対応する。

一方、(b)グループに属するものは、より個別的な、受け取り手にとって同定しにくいまたは同定不可能なものであり、Lambrecht (1994) の分類では【同定可能・不活性的】あるいは【同定不可能・先行文脈に連結された、新しい情報】のクラスに対応すると考えられる。

同定可能性という性質との関わりで、それぞれの指示対象のタイプの頻度は、有題文・無題文に分けて、以下の【表 1】で示されている。

【表 1】リード文における、同定可能性による指示対象のタイプとその頻度

	「NP は」	「NP が」
同定可能・活性的	38 (84.5%)	8 (12.3%)
同定可能・アクセス可能	7 (15.5%)	3 (4.6%)
同定可能・不活性的／同定不可能・連結された新しい指示対象	0	54 (83%)
計	45 (100%)	65 (100%)

【表 1】からも明らかなように、傾向として、受け取り手にとって同定可能・活性的な指示対象を持っている主格名詞句は主題として提示されるのに対し、同定不可能・不活性的な指示対象を持っている主格名詞句は主題にならず、「が」でマークされる。

以下では、指示対象の各タイプの例を挙げたい。

#### 「NP は」：同定可能・活性的な指示対象

例 (2) の「アメリカのブッシュ大統領」と例 (3) の「政府」のような主格名詞句の指示対象は頻繁にニュースの話題になり、一般的な視聴者にとって知られている、同定可能なものである。このため、主格名詞句が「は」でマークされ、最初の出現から主題として提供される。

- (2) アメリカのブッシュ大統領は、同時多発テロ事件から 1 年を迎えた 11 日、テレビ演説し、イラクのフセイン政権との対決姿勢をあらわにしました。

[NHK News 9 / 12.09.02]

- (3) 政府は 11 月 17 日の小泉総理大臣の北朝鮮訪問に、政府専用機を使用する方針です。

[NHK News 7 / 11.09.02]

「NP は」：同定可能・(先行文脈から) アクセス可能な指示対象

本研究で考察したニュースでは、例(4)の「二人」と例(5)の「打ち上げ」のような、アクセス可能な指示対象が主題となる場合は文の第2節以降にしか見られない。これらの主題の指示対象は例えば上記の例(2)と(3)の活性的な指示対象とは異なり、一般的に個人・事物、ないしはイベント(受け取り手の関心・意識の焦点にないもの)を表しているが、いずれの場合も主題として提示される指示対象は既に先行文脈に何らかの形で(具体的に、例(4)では「16歳の少年二人」、例(5)では「打ち上げられ」のように)導入されている、アクセス可能な指示対象である。

- (4) 今年6月、埼玉県春日部市の定時制高校の生徒が死亡した集団暴行事件で、刑事処分が相当だとして、障害致死の罪で起訴された 16歳の少年二人の初公判が開かれ、  
／【節1】

二人は起訴事実を認め、一生をかけてつぐないたいと述べました。【節2】

[NHK 関東・甲信越地方のニュース 19:55 / 10.09.02]

- (5) 日本の収録ロケット、H2Aの3号機が、今日午後5時20分、鹿児島県の種子島宇宙センターから打ち上げられ、／【節1】

予定通り2つの衛星を切り離して、／【節2】

打ち上げは成功しました。【節3】

[NHK News 10 / 10.09.02]

「NP が」：同定可能・活性的な指示対象

以下の例(6)の「国土交通省」と例(7)の「旧第一勧業銀行」のような、例えば政府機関・経済機関であるため受け取り手にとって同定可能・活性的であると考えられる指示対象の場合でも、「が」でマークされることがある。

- (6) 先月、東京の首都高速道路のトンネルでタイルが落下した事故を受けて、国土交通省などが全国の444のトンネルを緊急点検しました。 [NHK News 7 / 1.05.02]

- (7) 旧第一勧業銀行がおよそ160億円の税金を納めていませんでした。

[NHK News 10 / 9.09.02]

「NP が」：連結された新しい指示対象(不活性的)

以下の例(8)の「国際展示会」と例(9)の「日本人の妻」のような、個人・事物またはイベントを表している指示対象は受け取り手にとって新しい・不活性的な情報であり、その主格名詞句は主題にならず、「が」でマークされる。

- (8) 車椅子や、介護用のベッドなど、最新の福祉器機を紹介する国際展示会が、今日から東京ではじまりました。 [NHK 首都圏ニュース 20:45 / 10.09.02]

- (9) よど号ハイジャック事件の後、北朝鮮、朝鮮民主主義人民共和国に渡り、実行犯の一人と結婚した日本人の妻が帰国し、旅券法違反の疑いで逮捕されました。

[NHK News 9 / 10.09.02]

以上の実例の考察から、テレビ・ニュースのリード文では、傾向として、「は」でマークされる主格名詞句は受け取り手の関心を集めており、同定可能・活性的な指示対象を持っているのに対し、「が」でマークされる主格名詞句はより個別的な、受け取り手にとって同定不可能・不活性的な指示対象を持っているということが明らかになった。

### 3.2 出来事のタイプ

本節では、テレビ・ニュースのリード文における【NP は】・【NP が】の選択とその文で述べられている出来事のタイプとの関係を探りたい。

考察したニュースのリード文は大きく、以下の2つのタイプに分けられると考えられる。

(a) ある主体の行動について述べる文

(b) ある事柄やある人物に関する出来事の発生について述べる文

伝えられる内容との関わりで、ある主体の行動を記述する文の場合では意志的な動作を表す述語がより多く見られるのに対し、事柄などの発生を記述する文の場合では非意志的な動作を表す述語が頻繁に見られる。

実際のデータで現れるそれぞれの動詞のタイプの頻度を有題文・無題文に分けて以下の【表2】で示すことにする。

【表2】有題文・無題文における述語のタイプ

	有題文	無題文
[+意志性] の述語	35 (77.8%)	12 (18.5%)
[-意志性] の述語	10 (22.2%)	53 (81.5%)
計	45 (100%)	65 (100%)

【表2】から明らかなように、考察した資料では、有題文では意志的な動詞が用いられるのに対し、無題文では非意志的な動詞が用いられる傾向が見られる。

これは、先行研究の野田(1984)で述べられている、新聞記事の冒頭文の述語の性質に関する【条件2】(すなわち、【文の述語が意志的な動作を表す動詞であれば、その文は有題文になりやすい。一方、非意志的な動作を表す動詞であれば、無題文になりやすい。】)に対応すると考えられる。

具体的に、考察したテレビ・ニュースのリード文では、以下のような述語が現れる。ニュースの談話では、有題文では決定や発言を表す意志的な動詞が頻繁に用いられるのに対し、無題文では受身や非意志的な動詞が用いられるという傾向が見られる。

有題文の場合：

●意志的な動作を表す動詞 (77.8%)：

決定の表現 (「～ことを決める」、「～決定をする」、「～ことにしている」など)

発言の表現 (「明らかにする」、「考えをしめす」、「みとめる」、「～としている」)

その他 (「訪れる」、「会談する」、「捜査する」、「装置をとる」、「行う」など)

●非意志的な動作を表す動詞 (22.2%)：「見えなくなる」、「～ことになる」など

無題文の場合：

●意志的な動作を表す動詞 (18.5%)：「検討する」、「帰国する」、「出発する」など

●非意志的な動作を表す動詞 (81.5%)：

「(ことが) わかる」

受身 (「逮捕される」、「盗まれる」、「開かれる」、「行われる」など)

その他 (「はじまる」、「衝突する」、「けがをする」、「死亡する」など)

以上のデータの考察から、テレビ・ニュースのリード文の有題・無題とそこで用いられている述語との関係について、次のようなことがいえる。

決定や発言を表すような意志的な動詞が用いられる多くの場合では、リード文は有題文として提示される。これに対し、受身や非意志的な動詞が用いられる多くの場合では、リード文は無題文として提示される。この傾向は、野田 (1984) で説明されている、新聞の冒頭文と同様の傾向を示している。

### 3.3 指示対象のタイプと出来事のタイプ：二つの要因の組み合わせ

次に、3.1 節と 3.2 節で述べた、[主格名詞句の指示対象のタイプ]と[述語のタイプ]という、2つの要因を合わせて考察する。

3.2 節では、ニュースのリード文は(a) [ある主体の行動について伝える文]と(b) [ある事柄やある人物に関する出来事の発生について伝える文]に、大きく分けられると述べた。また、伝えられる内容との関わりで、前者の場合では意志的な動作を表す述語が多いのに対し、後者の場合では非意志的な動作を表す述語が多いことが明らかになった。

一方、それぞれのグループの主格名詞句の指示対象について、次のような傾向が見られる。(a) [ある主体の行動について伝える文]の場合では、主体は一般的に受け取り手にとって同定可能(既知)であり、最初の出現から主題として現れる。これに対し、(b) [ある事柄やある人物に関する出来事の発生について伝える文]は、すべて現実の世界で起きた事柄を記述すると共に、後続する談話で注目される、受け取り手にとって新しい(同定不可能な)指示対象を導入する機能を持っており、無題文である。

以下の【表 3】と【表 4】では、有題文・無題文に分けて、考察した資料で見られる各タイプの指示対象と各タイプの述語の共起の分類と頻度が示されている。



【表 3】と【表 4】からも明らかなように、傾向として、有題文では、主格名詞句において、同定しやすい指示対象と意志的な動詞との共起が見られるのに対し、無題文では、同定しにくい（新しい）指示対象を持っている主格名詞句と非意志的な動詞との共起が見られる。

【表 3】「は」でマークされる主格名詞句と述語との共起の分類と頻度

		意志的動詞	非意志的動詞	計
主格名詞句 の指示対象	同定しやすい (政府機関、組織など)	32 (71.1%)	6 (13.3%)	38 (84.5%)
	同定しにくい (個人、事物、出来事)	3 (6.6%)	4 (8.8%)	7 (15.5%)
計		35 (77.8%)	10 (22.2%)	45 (100%)

【表 4】「が」でマークされる主格名詞句と述語との共起の分類と頻度

		意志的動詞	非意志的動詞	計
主格名詞句 の指示対象	同定しやすい (政府機関、組織など)	6 (9.2%)	2 (3.0%)	8 (12.3%)
	同定しにくい (個人、事物、出来事)	6 (9.2%)	51 (78.4%)	57 (87.6%)
計		12 (18.5%)	53 (81.5%)	65 (100%)

ここで、野田(1984)で述べられている、新聞記事の冒頭文における傾向と比較したい。野田(1984)では、冒頭文の主格名詞句が意志的な動作の動作主である場合、[文の述語が表す動作が予想しやすく、または動作主がその動作をするに意外性が少なければ、文は有題文になる。一方、動作が予想しにくく、動作主がその動作をするに意外性があれば、文は無題文になる(条件 3)]とされる。

テレビ・ニュースにおいて、【表 3】からも明らかなように、有題文の多くの場合では、意志的な動作の動作主は政府機関・組織などである。さらに、上記で述べたように、その意志的な動作は多くの場合「決定」または「発言」であり、政府機関などの動作主に関して、意外性の少ない動作（あるいは期待される行動）であるといえる。

一方、既に挙げた例(7)「旧第一勧業銀行がおよそ160億円の税金を納めていませんでした。」のように、意外性を持っている動作（納めていることが当然の義務なのに、「税金を納めないこと」）の場合、主格名詞句は同定可能であっても「が」でマークされ、文は無題文として提示される事例も見られる。

以上のことから、[条件 3]に関して、テレビ・ニュースのリード文の場合でも、新聞記

事の冒頭文と同じ傾向が見られるといえる。

一方、冒頭文の主格名詞句が意志的な動作の動作主でない場合に関して、野田（1984）では〔主格名詞句の指示対象が読み手の関心を集めていない、または予想しにくい場合、その文は無題文になる。一方、主格名詞句の指示対象が読み手の関心を集めており、予想しやすい場合、文は有題文になる。（条件4）〕とされる。

テレビ・ニュースにおいて、【表3】と【表4】からも明らかなように、無題文となるものは多くの場合、個人・事物といった、個別的な指示対象（すなわち、受け取り手の関心を集めていない、あるいは同定しにくいもの）を主格名詞句とする文である。一方、有題文において、非意志的動詞を持っている文の実例の中で、政府機関などのような、受け取り手の関心を集めている同定可能な指示対象を主題として提示する文のほうが多い。したがって、【条件4】に関しても、テレビ・ニュースのリード文では新聞記事の冒頭文と同じ傾向が見られるといえる。

以上の3.1～3.3節では、テレビ・ニュースのリード文において、有題文・無題文の選択に大きく関わる二つの要因（すなわち、主格名詞句の指示対象のタイプ・認知的ステータスと伝えられる出来事のタイプ）を取り上げ、分析した。以上の分析の結果をまとめると、次のようになる。

まず、主格名詞句のタイプ・認知的ステータスに関して、傾向として、ニュースの受け取り手の関心を集めている、同定可能な指示対象を表す主格名詞句は主題として提示され、受け取り手にとって同定しにくいあるいは同定不可能な指示対象を表す主格名詞句は「が」でマークされ、主題として提示されない。

次に、伝えられる出来事のタイプを反映する述語のタイプに関して、有題文では意志的動詞が多く用いられるのに対し、無題文では非意思的動詞が多く用いられる。また、リード文における主格名詞句と述語のタイプの共起については、有題文では同定しやすい指示対象を持っている主格名詞句と意志的動詞、無題文では同定しにくい主格名詞句と非意志的動詞との共起が見られる。

資料の考察の結果、有題文・無題文の選択に関わる要因において、上記で述べたテレビ・ニュースのリード文の場合で見られる現象は明らかに野田（1984）で分析される類似した談話のタイプである新聞記事の冒頭文と同じ傾向を見せているといえる。

### 3.4 情報の文脈化・連結

本節では、リード文の文頭で提供される情報を考察し、リード文で新しく導入される主格名詞句が受け取り手の背景的知識にどのように連結されるかを分析したい。

ニュースの最初の発話であるリード文で提供される情報は受け取り手にとって未知であるが、受け取り手は何らかの背景的知識を持っていると考えられる。従って、受け取り手が伝えられた内容を容易に理解・処理できるようにするためには、リード文で導入され

る新しい情報が同定可能になるように、受け取り手の背景的知識に既に存在する情報と結び付ける必要がある。

したがって、リード文において、ニュースの主な話題が伝えられる前に、受け取り手がそれを容易に位置づけたり、既に持っている知識と連結させたりするために、文頭では時間・場所・その他の情報（例えば状況・主格名詞句の指示対象に関する説明など）が提供される。

本研究で考察した資料において、これらの情報は、大きく分けて、二つの機能を持っていると考えられる。

- (a) 導入されるまだ同定不可能な事柄を、受け取り手が既にそれについて何らかの知識を持っていると想定される別の事柄（多くの場合、過去の事柄）と連結する機能
- (b) 導入される指示対象または事柄について、別の事柄と連結せずに、より詳しく説明する機能

以下では、「連結機能」の実例として、例（10）と（11）を挙げたい。例（10）では、今回報道される新しい内容（「プルサーマル計画の事前了解の取り消し」）は既に知られていると想定される事柄（「東京電力のトラブル隠し」）に関連させる。

同じように、例（11）では、今回新しい情報として伝えられる内容（「ある人物が逮捕された」）は、処理しやすくするために、連体修飾節の言語手段を用いて、以前に話題となった過去の事柄（「よど号ハイジャック事件」）に関連させる。

(10) 「東京電力が、原子力発電所のトラブルを隠していた問題」を受けて、新潟県のヒラヤマ知事と、柏崎市のサイカワ市長、それに刈羽村のシナダ村長は会談し、柏崎刈羽原子力発電所3号機の、プルサーマル計画の事前了解を、取り消すことを決めました。 [NHK News 10 / 12.09.02]

(11=8) 「よど号ハイジャック事件の後、北朝鮮、朝鮮民主主義人民共和国に渡り、実行犯の一人と結婚した」 日本人の妻が帰国し、旅券法違反の疑いで逮捕されました。 [NHK News 9 / 10.09.02]

次に、「説明機能」の実例として、例（12）では、伝えられる新しい情報（「ある人物の死亡」）は別の事柄と連結されないが、時間的・空間的に位置付けしやすくするように、最初にその事柄の発生時間と場所についての情報が提供される。

また、例（13）では、連体修飾節の言語手段を用いて、主格名詞句についての説明（「車椅子や、介護用のベッドなど、最新の福祉器機を紹介する」）が提供される。

(12) 今夜、神奈川県大和市の住宅で、幼児二人が死亡しているのを、帰宅した父親が見つけました。 [NHK 関東・甲信越地方のニュース 22:55 / 10.09.02]

(13=9) [車椅子や、介護用のベッドなど、最新の福祉器機を紹介する] 国際展示会が、  
今日から東京ではじまりました。 [NHK 首都圏ニュース 20:45 / 10.09.02]

考察した資料において、上記で述べた 2 つの機能を反映する導入表現の頻度は、有題文・無題文に分けて、以下の【表 5】と【表 6】で示されている。これらの表において、「導入表現あり」とは、リード文の文頭に、主格名詞句が提示される直前に、それを導入する何らかの表現が使用される場合を示す。一方、「導入表現なし」とは、導入表現が使用されず、主格名詞句が直接リード文の文頭で提示される場合を示す。

【表 5】有題文における導入表現

「NP は」			計	
導入表現あり	機能：連結	～事件で	4 (9.7%)	18 (36.5%)
		～問題で	3 (7.3%)	
		連体修飾節	2 (4.8%)	
		～について	2 (4.8%)	
		～として	2 (4.8%)	
		～をうけて		
		その他	4 (9.7%)	
	機能：説明	～の	5 (12.1%)	10 (24.3%)
		～(場面・状況)で	3 (7.3%)	
		その他	2 (4.8%)	
導入表現なし			13 (31.7%)	
計			41 (100%) <sup>4</sup>	

【表 6】無題文における導入表現

「NP が」			計	
導入表現あり	機能：連結	～事件で	7 (12.6%)	32 (55.1%)
		～として	6 (10.3%)	
		連体修飾節	4 (6.8%)	
		～問題で	3 (5.1%)	
		～をうけて	3 (5.1%)	
		～について	2 (3.4%)	

<sup>4</sup> 【表 5】の合計 (41) は、有題文全体の 45 件のなかから、主節 2 以降で現れる主題 (4 件) を除いたものである。

		その他	7 (12.8%)	
	機能：説明	[場所]	9 (15.5%)	25 (43.1%)
		[時間+場所]	6 (10.3%)	
		～(場面・状況)で	3 (7.3%)	
		その他	7 (12.8%)	
導入表現なし			1 (1.7%)	
計			58 (100%) <sup>5</sup>	

【表 5】と【表 6】から明らかなように、テレビ・ニュースのリード文において、主格名詞句の指示対象が受け取り手にとって同定可能な有題文の場合、主格名詞句が提示される前に、受け取り手がそれについて既に知識を持っている別の事柄と連結させたり、説明させたりするが、以下の例(14)のように、受け取り手の関心を常に集める、活性的な指示対象であれば、主格名詞句が直接リード文の文頭で導入されることも多く、約31%を占める。

(14) 【ゼロ導入】皇太子ご夫妻は、山梨県の大菩薩嶺で登山を楽しまれました。

[NHK News 9 / 12.09.02]

一方、無題文において、指示対象または伝えられる事柄全体が同定しにくい場合、主格名詞句が提示される前に、何らかの導入表現が用いられる。しかし、有題文と対照的に、無題文の主格名詞句の指示対象が受け取り手にとって同定可能(活性的、ないしはアクセス可能)であっても、一つの例外(既に挙げた例(7)の「旧第一勧業銀行がおよそ160億円の税金を納めていませんでした。」)を除いて、直接的にリード文の文頭で提示されることなく、「連結」あるいは「説明」の導入表現を伴っている。

#### 4. まとめ

テレビ・ニュースの最初の発話であるリード文における有題文・無題文の選択に、主格名詞句の、受け取り手にとっての同定しやすさ、または伝えられる事柄のタイプとそれに対する意志性・意外性などは大きく関わっているということが明らかになった。考察の結果をまとめると、次のようになる。

傾向として、有題文の場合、リード文ではある主体の行動が記述され、その主体は受け取り手にとって同定しやすい指示対象であると同時に、意志的な動作の動作主である。また、主題が提示される前に、受け取り手がそれについて既に知識を持っている別の事柄と

<sup>5</sup> 【表 6】の合計(58)は、無題文全体の65件のなかから、主節2以降で現れる主格名詞句(8件)を除いたものである。

連結させるために、一般的に何らかの導入表現が用いられている。さらに、主題が直接リード文の文頭で提示されることが約 30% 見られたことは、有題文のリード文が持つ特徴の一つであると考えられる。

一方、無題文の場合、リード文ではある事柄の発生が記述され、その事柄に関わっている主体は受け取り手にとって同定しにくい指示対象であり、多くの場合では意志性を持たないものである。また、ほとんどの場合では、新しい指示対象が導入される前に、何らかの表現によって、受け取り手がそれについて既に知識を持っている別の事柄と連結させる。

#### 【参考文献】

- Chafe, W. L. (1976) "Givenness, Contrastiveness, Definiteness, Subjects, Topics, and Point of View", in Ch. N. Li (ed.), *Subject and Topic*, New York, Academic Press, pp. 25-55.
- Chafe, W. L. (1987) "Cognitive Constraints on Information Flow", in R. Tomlin (ed.), *Coherence and Grounding in Discourse*, Amsterdam, John Benjamins, pp. 21-51.
- Givón, T. (1988) "The Pragmatics of Word-Order: Predictability, Importance and Attention", in M. Hammond et al. (eds.), *Studies in Syntactic Typology*, Amsterdam, John Benjamins, pp. 243-284.
- Lambrecht, K. (1994) *Information Structure and Sentence Form*, Cambridge, Cambridge University Press.
- Prince, E. F. (1981) "Toward a Taxonomy of Given-New Information", in P. Cole (ed.) *Radical Pragmatics*, New York, Academic Press, pp. 223-255.
- 野田尚史 (1984) 「有題文と無題文—新聞記事の冒頭文を例として—」『国語学』136, pp. 65-75.